

別紙（中間評価書）

平成 30 年度文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）

通し 番号	1 2	事業区分：劇場・音楽堂等機能強化総合支援事業 助成対象団体名：公益財団法人北九州市芸術文化振興財団 施設名：北九州芸術劇場
<p>助成対象活動に関する評価</p> <p>（妥当性）</p> <p>北九州市が策定した「北九州市文化振興計画」を踏まえた北九州芸術劇場のミッション、ビジョンと事業計画の整合性については明確で、これらの達成に向けて事業が適正に組み立てられていると認められる。</p> <p>「北九州市芸術劇場の基本方針」に定める「にぎわいの拠点」「地域文化の拠点」「文化創造の拠点」の3つの基本方針に沿って、「創る」「育つ」「観る」「支える」の4つの事業コンセプトにより劇場運営を行っている。</p> <p>これらのコンセプトに基づき、劇場から様々な手法で鑑賞機会の拡大のアプローチを行うとともに、社会課題の解決を試み、あらゆる人々が芸術文化を享受できる社会基盤の構築を目指すなど、助成に値する文化的、社会的意義等が認められる。</p> <p>（有効性）</p> <p>一部に当初予定していた実施回数に満たなかった活動があるものの、目標の達成に向けて、事業が着実に推移していると概ね認められ、アウトカム発現の可能性に期待が持てる。ただし、目標の達成度を測定する方法等については、不明確な部分がある。</p> <p>（効率性）</p> <p>事業はほぼ計画通り実施されており、事業期間は適切であったと認められる。</p> <p>一方、事業費については、概ね適切であったと認められるものの、一部の活動において、要望時の予算額と報告時の実績額との間で乖離を生じており、今後、より実効性のある予算積算と適切な予算管理が望まれる。</p> <p>（創造性）</p> <p>公演事業では、国内外の優れた作品を招へいすることにより、九州圏内における鑑賞機会の創出に寄与した。特に、開館当初から継続している山海塾との共同製作では、4年ぶりの新作で世界初演となる「Arc 薄明・薄暮」を上演した。</p> <p>創造事業では、九州男児をテーマとしたプロデュース公演「せなに泣く」や、地元で暮らす高齢者に若手劇作家が取材した「Re:北九州の記憶」を創作し、いずれも地域の表現者を多く起用し、その発掘・育成に寄与した。特に、「Re:北九州の記憶」は、高齢者と若い劇作家の異世代交流を生み出すとともに、演劇と地元住民の新たな接点を生み出す事業となっており、独創性・新規性が認められる。</p> <p>学芸事業では、市内の福祉関係団体と連携した「ひとまち+アーツ協働事業」、市内交通機関等と連携した「北九州芸術工業地帯」など、地域を構成する多様な主体と</p>		

別紙（中間評価書）

の協働による事業を行った。地域における社会課題の解決に貢献が見られ、一定程度の先導性が認められる。

入場者・参加者数は、全体として目標値を下回る結果となったが、劇場の立地する商業施設の15周年に合わせたダンス企画や、障害者との芸術活動、引きこもりなど若者の問題に文化芸術でアプローチした取り組みは、新聞各紙でも多く取り上げられており、文化芸術が地域社会で果たしうる役割について、広く伝えることに成功した。事業実施によって、当該劇場の国内での評価の向上につながっていると一定程度認められる。

（持続性）

組織面では、市からの出向による正規職員と嘱託職員、臨時職員、業務委託により、事業実施に必要な相当規模の体制が組まれている。

財務面では、市との密接な関係を基礎とした安定的な財務基盤の確保がなされている。

以上のことから、組織活動が持続的に発展し、アウトカムの発現・定着が期待できると認められる。

（総 評）

北九州芸術劇場の事業計画「創造都市＝クリエイティブ・シティ実現に向けた『北九州芸術劇場・長期ビジョンに基づく中期計画』」は、妥当性、有効性、効率性、創造性、持続性において適切に進められていると概ね認められる。

今後も北九州芸術劇場が持つ演目に応じた適切な鑑賞環境を実現する劇場機構といたった自らの強み・特色を活かし、戦略的な事業展開に期待したい。

中間評価結果 (可否のいずれかに○を附す)

継続

可

否